

## 著者に聞く

## 『物語 タイの歴史——微笑みの国の真実——』



2000年に及ぶタイの通史を簡潔にまとめた新書『物語 タイの歴史』。タイの政治史、特に外交面にも光を当てた読みやすい歴史本。タイと仕事をする、あるいは駐在員になる人にとって役立つ参考書のような一冊。今回、先の総選挙の結果を踏まえ、著者である横浜市立大学の柿崎一郎准教授に、改めて本書について聞いた。

▶中央公論新社・2007年9月刊・920円+税



著者◎横浜市立大学  
国際総合科学部  
柿崎一郎 准教授

### 》本書を書くに当たって力をおいた点は？

たまたま慶應義塾大学でタイの歴史の授業をやる機会があったので、それが本書のベースになっています。子どものころ、父の転勤でバンコクに暮らしたことがあるのと、鉄道が好きなので、実は専門はタイの鉄道史です。いわゆる歴史や政治史の専門家ではありません。ただ当時タイの歴史に関する読みやすい入門書がないという問題意識はあって、そんなときに出版社から声をかけていただいたのがきっかけでした。

基本はタイのいわゆるナショナルヒストリー、現在タイの学校で教えているような歴史を簡単に日本語でまとめた、というところですね。それと国際関係史的な側面で、タイがいかに周りの国との関係を構築してきたのかもひとつのテーマとなっています。さらに、タイの通常の歴史だとタイ族が入ってくる前の歴史というのはあまり触れられていないので、そのあたりを最初のほうで、領土の歴史と土地の歴史に分けて触れてみました。タイは複雑な民族と文化が入り混じって今の状態に至っているわけです。国の枠組みというのは過去においても、また未来においても、決して絶対的なものではないということです。

### 》19世紀後半以降の内政と外交政策は興味深い。タイ人のしたたかさにも驚嘆。これはタイ人特有の気質でしょうか。中国との関係は？

外交では、イギリスとフランスがタイにとってはいちばん大きな影響を与えていくわけですがけれども、いわゆる帝国主義の波が波及してきたという点では、ビルマ、中国、ベトナムときて、タイがいちばん最後でした。なので、周囲の展開をみて学習する時間はあったと思います。ポイントとしては、やはりひとつの国との関係を強化させすぎないバランスです。タイは基本的には親英で、19世紀後半からイギリスとの経済的な関係が非常に大きくなりました。けれども政治的な面でのイギリスの権益をあまり高めすぎるのは困ります。逆に領土的野心を先に示してきたのはフランスでした。ですからフランスとイギリスをうまくバランスとって拮抗させてやろう、といったことを考えていました。たとえば鉄道建設のときには、どちらでもなくドイツ人を利用してバランスをとる。いろんな勢力を、利用できることは利用し、危ないところで

は対抗勢力を盛り立てるといふかたちで、拮抗させていくんですね。

中国からは多くの人が入ってきたことから、さまざまな面で大きな影響を受けています。たとえば今の都会にいるタイ人の価値観は、金銭感覚の面も含めていわゆる中国人のものといっても過言ではありません。ただ、タイ人として昔から維持してきた慈悲深さとか、情け深さとかは都会に住む中国系の人にも受け継がれています。金儲けだけでいいのであれば、タックシンに反発する人たちなんて出てこなくてもよかったわけです。彼に欠けていたもののひとつは、恐らくそのあたりなのではないかと思います。

### 》総選挙の結果と当面のタイの政治をどうみますか？

2007年末の選挙でも、単独の政党としてはタックシン派が勝っています。その後、タックシン派政権を司法の力で抑え込み、反タックシン派の民主党中心にまとまって政権を維持してきたわけですが、結局また元に戻りました。問題なのはこの先どういう方向に行くかです。今度の政権が、前の親タックシン派政権と同じようなことをすぐにやり始めると、また反発が出てきて混乱に陥っていく。いかに露骨な利益誘導をやらないかということが、いちばん重要なのではないかと思います。新政権は、しばらくはよく様子を見てみないといけません。他方タックシン派政権の復活で、いろんなところで不毛な対立が再燃する可能性があります。たとえばバンコク都は都知事が民主党ですが、都が管轄する都市鉄道、BTSの延伸も対立の影響を受けて相当遅れました。政治的な対立が実はあちこちにあり、都市鉄道に関しては今ようやく動き出したというところですが、今後順調に整備が進むかどうかはそのような対立の有無にかかっていると思います。

敗れた民主党は、連立を組んでいたネーウィン派のプームチャイタイ党が地方で票を取ってくれば、たとえ単独では負けても再び複数の小党との連立に望みをつないでいたでしょう。しかし、タイ貢献党が過半数を確保してしまったので、連立を組んでいた小政党の多くはタックシン派と合流しました。小党はいつも非常においしい役を演じているわけです。これがまさにタイの政治の伝統といえるのでしょうか。

(文責：当財団) ●